

災害支援・教育復興にむけて

つなぐ



日教組災害対策本部

〒101-0003

東京都千代田区一ツ橋 2-6-2

HP:<http://www.jtu-net.or.jp/>

## 連合・第3次被災地支援ボランティア 報告

「きっと、きます」

成田 恭子 中央執行委員

東北の言葉で捨てることをなげるといふ。被災した方の背中となげられたものの数々は言葉よりも雄弁に物語る。大槌地区桜木町の川縁の土手には様々なものたちがなげられている。泥にまみれたピアノ・学習机・・・

「一切合切家具はなげてくれ。それから庭の泥も全部なげてくれ。」「でも、私はここにいない方がいい。つらくてみてられない。」そう言っておばあさんは私たちに背を向けられた。

おじいさんの遺影と仏壇。物置にはおむつ。おじいさんの介護をしていたのかもしれない。庭に面した部屋のベッドはおじいさんのものだったのだろうか。きっとここから庭をみていたのだろうか。私たちはただ黙って泥を掻き出し、なげつつける。水を含んだ畳と布団は重い。おばあさんの家で捨てられなかったもの。おじいちゃんの遺影と仏壇。庭から泥を掻き出したら黄水仙が息を吹き返した。



別の家のお父さんは、最初から最後まで私たちに背を向けて、電気ドリルや電気ノコに油を注している。しっかり者のお母さんが「物置き除くはガラスケースを除いて全部なげてください」といわれる。聞けばお父さんは手術されたばかり。地震のとき、お父さんは腰が抜けて立てなかったという。物置の中には魚釣りの竿や木工の道具がぎっしり詰まっている。お父さんの趣味の道具だったに違いない。どんどんなげる。「これもだめだ」お父さんは木工道具をごろっとなげる。庭の泥を掻き出したら、松の盆栽が出てきた。「よく流れなかったですねえ。」

「ああ本当に良かった。」お父さんが始めて笑われる。ほっとする。この庭でも泥にも負けず黄水仙が花を咲かせている。

ファミリーショップのお母さんは町中を走り回って、避難をしているお得意さんの家の掃除を引き受けている。お父さんは50台で脳梗塞を患い体が不自由だ。津波が来たとき裏山に逃げた。お父さんを懸命に引っ張り上げた。「そうしたらね、逃げ遅れた近所の人が見えたのよ。水が胸のあたりまできていてね。足で溝に落ちないように探りながら助けに言ったのよ。でもねえ、返事ができても、もう震える力もない人はダメだったねえ。みなで体をさすっただけけどダメだった。お店にあるものは何でも出したのよ。借金までして、お店を再開するのもどうしようかと思っただけど、もう1回がんばることにしたのよ。町を元気にしなくちゃねえ。逃げているお得意さんの家の掃除も引き受けてるのよ。」そうお母さんはこともなげに話される。お店の軽トラをボランティアに貸すなど面倒を見てくださる。「ありがとうねえ。きれいになった桜木町遊びに来てね。」「きっときます。」



東和のベースキャンプを出発して約2時間、被災地に入る。何度入っても私たちは息を呑み、黙り込まざるを得ない。圧倒的な自然の猛威に心が折れてしまうのも分かる。しかし、春とともに泥にも負けず、桜が黄水仙が咲き始めたように、この町の人たちは希望と笑顔を取り戻している。そのことにボランティアに行った私たちは勇気と元気をいただいて帰ってきた。



現在、第4次のボランティアが活動中です。第5次のボランティアは、5月2日から10日を予定しています。